
はじめに

練習量がものを言うという点で、語学の習得はスポーツの習得に似ています。テニスを始めるのに、技術書を読むことは無意味ではありませんが、まずはボールとラケットを手にして少しでも多く練習をすることの方が大切でしょう。この「練習重視」が本書の一貫した姿勢です。文法事項の説明は丁寧に分かりやすく書いたつもりですが、それでも一読しただけでは何となくあやふやな部分が出てくるかもしれません。そんなときは、あまり細かい点にこだわらずに、まず問題を解いてみてください。実際に自分でドイツ語の文章を書いてみることで、分かりにくかった部分が理解できるはずです。コンピューターのマニュアルを読むよりも、実際にコンピューターを扱う方が分かりやすいのと似ているかもしれません。「案ずるより産むが易し」とでも申しましょうか。少しでも多くのドイツ語に触れてドイツ語に慣れること、これに勝る上達法はないと筆者は信じています。以下、本書を使う上での注意をいくつか記しておきます。

書いて覚える：ほぼ全ての問題が、独作文形式になっています。面倒がらず、必ずペンを取って書くようにしてください。書くことで、ドイツ語に慣れると同時に、知識の不備がはっきりと分かります。必要な単語は（ ）に入れて注をつけてあります。同じ単語が複数回使われたところで、（ ）による注がなくなります。

和独インデックスを使う：単語は数回使ったからといって、容易に覚えられないことも多いと思います。問題を解いていて、日本語に見合うドイツ語を思い出せないときは、巻末の「和独インデックス」を大いに活用してください。

単語の使い方を覚える：独作文は文法に習熟するための練習というばかりではなく、単語の使い方を学ぶ練習も兼ねています。一例を挙げれば、前置詞の使い方など文を作りながらさまざまな用法に触れることができます。実際に単語を使うことによ

て、その語について自分なりのイメージをふくらませていく作業は大切です。

音に慣れる：自分で書いたドイツ語を巻末の解答と照らし合わせた後、音声に収録されたネイティブスピーカーの発音を聴くようにしてください。また、一度自分で書いた文であればそれだけ記憶にも残りやすいので、音声を繰り返し聴くことは大いに効果があります。テキストなしに移動の車中などで聴くこともお勧めします。なお、第1課「文字と発音」では全ての、第2課以降についてはほとんど全ての練習問題が音声に収録されています（単語やフレーズの練習など完全な文になっていないもの、また文ではあっても主に書き言葉として使われる表現の練習については音声が入録されていません）。

本書は筆者の慶應義塾大学での授業がもとになっています。体裁としてはきわめてオーソドックスな仕上がりになりました。実用上必要とされる文法事項はほとんど全て含まれています。本書を書くきっかけを作っていただいた同僚のロシア語教員前木祥子さん、筆者の細かい質問に快く答え、また録音の役もお引き受けいただいた僚友 ハンス＝ヨアヒム・クナウプさんに、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

筆者

改訂版によせて

2006 年に初版を出版してから 19 年、おかげさまで多くの方々に使っていただきました。類書の中では、群を抜いた練習問題の分量が、評価していただけた一つの理由かもしれません。

今回の改訂において、本書を CD 版から音声ダウンロード版にアップデートして出版いたします。使いやすくなった音声をより活用していただければと思います。改訂にあたり、文法の解説を再度吟味し、より理解しやすいものとなるよう加筆修正いたしました。また単語や表現も現在の日本社会に即したものとなるように見直してあります。学習内容については全体の構成も含めて旧版をそのまま踏襲し、この一冊で実用上必要とされるドイツ語の文法事項を全て網羅しています。

初版のまえがきでも触れたことですが、外国語の習得において最も大切なのは、少しでも多く、その言語に触れて慣れることです。本書の学習においても、積極的に音読し、手で書きとめることを通してドイツ語に馴染んでいただきたいと願っています。今回、新たに文法事項索引を付け加えました。忘れてしまった文法事項の説明にも、簡単にアクセスできると思います。和独インデックスと併せてご活用いただければ幸いです。

音声は①②の2つに分かれています。

①第1課～第 20 課

②第 21 課～第 39 課

なお、CDBOOK 版から音声ダウンロード版への改訂に際し、音声を細かく再チェックして、より鮮明な音になるよう見直してあります。

2025 年 7 月 25 日

森 泉